

第四回東亞アルタイ学会

岡田英弘

東亞アルタイ学会(East Asian Altaistic Conference)は、一九六六年七月、京都の羽田記念館において招集された日本、中華民国、大韓民国の北アジア専攻の言語学者、歴史学者の集会で設立されたもので、その母体となつたものは、いわゆる「野尻湖クリルタイ」の常連である。資金はハーヴァード燕京研究所の特に提供するところであつた。

その第一回以来、一九六八年九月の第二回は韓国のソウル、一九六九年八月の第三回は中華民国の台北と、輪番で開催され、次は再び日本が当番のはずであつたが、ヴェトナム戦争によるアメリカ学界の資金難が反映して、ハーヴァードが資金を打ち切つたため、そのまま流れになつてしまつた。

一九七一年八月、第一回、第三回の出席者である松村潤、岡田英弘の両名が満洲文献の調査のため台北を訪れた。やはり第一回からの出席者であり、第三回の世話役でもあつた台湾大学の陳捷先、政治大学の札奇斯欽(Jagchid Sechin)両

教授と旧交を温め、かつその招きで台湾大学文学院史学系において一夕の講演会を催し、日本におけるアルタイ学の近況について語り、中国研究には漢学だけでは十分でなく、アルタイ語資料の活用が不可欠であることを論じたのであつた。会后、台湾大学正門前の、とあるコーヒー・ショップに休んだ四人の談は、ひとつ中絶している東亞アルタイ学会を再興しようじやないか、という所に到つた。

それがまた極めて忙がしい話で、一九七一年はたまたま辛亥革命の六十周年に当り、年内に開くならば中華民国政府の記念事業資金が出る可能性がある。それに間に合わせるには一刻の猶予もならない。幸い十月に京都でクリルタイ関係者の連絡会が開かれることになつている。そこで出席希望を取つて手続きを始めよう、ということになつた。

これが第四回東亞アルタイ学会の由来である。陳、札奇両氏の超人的努力のおかげで、会期も十二月二十六日(日)から三十一日(金)までときまり、日本からの出席者のうち五人は二十六日朝の中華航空機で台北に向つた。台北の松山国際機場は夏以来すつかり面目を一新して、羽田よりもずっと近代的な立派な空港になつていたが、そこで例の中国式の盛大な出迎えを受けて、宿舍の愛国西路十六号の自由之家(Liberty House)に入り、そこでレジストレーションがあつた。

今回のスポンサーは国立台湾大学、国立政治大学、国立故宮博物院の三者で、それぞれ一千米ドルを提供、出席者への招待状も台湾大学の閻振興校長の名で出ていた。教育部は会の進行状況を見守っていたらしく、途中で会が成功と見定めると二千米ドルの支出に同意し、最大のスポンサーとなった。とかくしづいと評判の教育部を説得するには、陳君ら関係者の言い知れぬ苦勞と努力があつたようである。ともかく会の経費は五千米ドルで、これには頻繁な宴会の経費は含まれていない。

二十七日(月)の午前は宿舍の自由之家から台大の専用バスで台大に行つて閻校長に敬意を表し、次に南港の中央研究院を訪問、正午に士林の故宮博物院で蔣復璁院長の歓迎を受けて別室で中食の宴。終つて同院所蔵の満洲語、モンゴル語、チベット語の書籍、文獻、地図類の特別展覧を見た。

夜は本会のこのたびの主席沈剛伯氏の招待で、中華路一五〇号永安大飯店二樓の華湘餐厅で、学界の名士たちと夕食を共にした。

二十八日(火)の午前は、会場の政治大学公共行政及企業管理教育中心(金華街一八七号之一)において開幕典禮が行われた。政大の本部は台北市南端の木柵にあり、交通に不便なので公共中心が選ばれたという。

儀式に先立つて各国からの出席者は政大の劉季洪校長の歡

迎を受け、九時から開会式が始まつた。花や各国旗や「第四届東亞阿爾泰学会議」の文字で飾られた大講堂には、壇上に各国の首席代表、各スポンサー代表が居並び、沈剛伯主席の歡迎演説で始まつた。P I A C の書記長 Denis Sinor (インディアナ大学教授)、日本の佐口透代表、韓国の黄元九代表、アメリカの Paul Hyer 代表(ブリガム・ヤング大学教授)のあと、少数民族代表の母國語による演説があつた。満洲語は広祿立法委員、チベット語は Zur Khang Dhang chen dge legs 元首相、ウイグル語は Abdullah Emiliolu 立法委員、モンゴル語は札奇斯欽教授である。この間カメラマンが多数右往左往して、夜の五時のテレビ・ニュースには開会式の模様はかなり長く出たそうである。

休憩の後十分からは札奇斯欽の中華民國におけるアルタイ学研究の現況についての報告があつた。

中食は中国辺境歴史語文学会理事長の広祿氏の招待で、峨眉山街四〇号の菜根香素食餐厅だった。

午後からは会議室に移つて護雅夫の司会でペーパー・リリーディングに入つた。昌彼得「納蘭性徳と通志堂経解」は、『経解』の編纂に納蘭性徳は関係がないとする乾隆帝の見解を批判し、さらに帝の見解を満洲人の文弱化に対する抵抗の表われと見たもの。

陳捷先「満文清国史本紀について」は、故宮博物院所蔵の

満文本紀を紹介し、その価値を強調した。

陳慶隆「東トルキスタン回部のアクサカル」は、コーカンド・ハン国の駐在員 *askaral* の沿革を説く。

方豪「清初に台湾に到つた満洲讀書人六十七」で本日の日程を終り、夜は劉校長の招待で、同中心において湖南菜の宴が開かれた。料理人は中央銀行から出張しているとのことであつた。

二十九日(水)午前は坂本是忠の司会で、哈勒楚倫(Harnod Hakanhulu)の「内モンゴル、ジャルトル右旗の火神崇拜」で始まつた。これは報告者の生地の風習を紹介、一經典のテキストをつけたものである。

蕭啓慶「元朝のケシク」はその名の通り宿衛制度の総論。

Paul Hyer「現代漢蒙境界の性格の一解釈」は、清末民初にオールドスの五原地方で水利権を一手に握つた王同春の興亡を説き、大いに示唆が多かつた。

午後は黄元九の司会で、札奇斯欽「国立故宫博物院所蔵モンゴル文資料の紹介」はモンゴル文の清実録の価値を論じ、多く漢文実録から訳されたものであることを明らかにした。

神田信夫「満洲国号考」は Manju こそが清初の国号であり、Aisin は漢文の「金」の訳に過ぎず、国内向けではなかつたことを、『旧満洲檣』によつて解明した。

李符桐「元朝建国とウイグル人の関係」は、わずか三ペー

ジの英文要約を人に代読させただけで、内容も学界周知の常識を並べたものであつた。

岡田英弘「十六、七世紀の外モンゴル」は、漢文史料に全く言及のないこの分野が、いかにモンゴル文史料によつて再構され得るかを示したものである。

夜は南昌街一段一三六号の陸軍聯誼庁(もとの台湾軍司令官の官邸)で台大の閻校長の招宴があつた。

三十日(木)の午前は Joseph Fletcher の司会で、広祿の「東北から新疆へのシボ族の西遷」から始まつた。これは満洲語で読まれた。何しろ高齢のこととて、たびたび中断して小休止を余儀なくされたが、とうとう長文を読み切つたのは敬服した。

次は身内の不幸にも拘らず馳せつけた池上二良が日本のアルタイ学研究の現況について報告した。

李霖燦「乾隆帝の御筆題跋より見た漢化の程度の見積り」は、乾隆帝がいかに名画を拙劣な詩や題跋でだいたにしたかをスライド入りで説明。さすがに教養の高い文人でなければ出来ないしごとで面白かつた。

池上が再び「満洲語 *prolative deri*」を読み、午前の日程を終つた。

午後は方豪の司会で松村潤「清朝開国の伝説」に始まつた。天聰九年に黒龍江から連れ来られた俘虜のフルハ人の口から

滿洲人が始めて聞いた三神女の伝説が翌年の『太祖武皇帝実録』に採り入れられた経緯を説くもの。

護雅夫「モンゴルの遊牧国家におけるソグド人の役割」は、新発見の突厥第一帝国時代のソグド語碑文を紹介、突厥の公用語はソグド語であったとする。

Snior「モンゴル武力についての小考」は、ハンガリー侵入時のモンゴル軍の不思議な行動から、モンゴルはあらかじめ厳密な時間表をもっており、そのために時間つぶしの作戦や急進撃を行ったものであることを説いたもので、たとえば南伐の際のフビライの行動などもこの理論で説明できる点で大いに興味があつた。

Fratcherは同治の回乱が孤立した現象でなく、全イスラーム世界にまたがるナクシュバンディーヤ運動の一端であることを説いた。

佐口透「チャガタイ家、その連続性と系譜、一二二七—一八〇〇年」は、このもつとも永く続いたチンギス・ハーン家の分家の歴史をたどつたもの。

夜は中央研究院の蔡元培館で、錢思亮院長の招宴があつた。

三十一日(金)の午前の司会はSniorで、黄元九「李朝後期の実学派の史学」は、政治的に失意の境遇にあつた人々の手で作り上げられた実学のなかに、滿洲問題がどう認識さ

れたかを論ずる。

陶晋生「余靖と宋の遼西夏政策」は、慶曆年間に西夏の李元昊の侵攻に悩んだ宋が、遼の興宗に融和政策をとつて二正面作戦の不利をさげ、西夏と遼の衝突に至つた経緯を分析する。

歐陽無畏「国立故宫博物院所蔵の一七二七年のポラネのチベット語上奏文について」は、故宮に存する多数のチベット文書のうちから選んで訳出し、前後の事情について考察を附したものの。この種のしごとが推進されると、これまで根本史料の少かつたこの分野が大いに開拓されることが期待される。

島田正郎は、『理藩院則例』の前身である『蒙古律』の搜索の苦心を語り、かつ中央アジア横断旅行の経験について述べた。

中食は西寧南路一二二号の会賓樓菜館において、中国歴史学会の黄季陸理事長、李守孔総幹事の招宴であつた。

午後はHyattの司会で、唐屹「南齊書所録の拓跋語名辞の予備的解釈」、スルカンの「チベット、ツァンパ王家の治世」(チベット語)、アブドラ「ウイグル文字の起源、伝播、モンゴル文字との関係」であつたが、この辺になると、連日の歓迎攻めで参加者は疲労困憊、討論の元氣も少くなつたのは是非もないことであつた。

ペーパー・リーディングを終つて直ちにビジネス・ミーティングに入り、故宮博物院の資料出版事業の価値を認め、外国の援助を呼びかけた決議、それに今回の組織者陳、札奇、昌三氏の功績をたたえる決議を採択、次回の開催国については、一九七三年夏に日本が引受けることになった。

夜は信義路一段二十巷一之一号の教育部長公館（もとの陳誠邸）において羅雲平部長の招宴があり、これをもつて一切の公式行事を終つた。

そのあと台大考古学館において「阿爾泰之夜」なる催しがあり、モンゴル、ウイグル、カザフ、チベットの歌や踊りがあると、来賓一同まで引張り出されて歌わせる有様で、Sinor博士までがハンガリーの民謡の一曲を歌う一幕もあつた。

今回の出席者は、日本が池上二良、神田信夫、松村潤、護雅夫、岡田英弘、佐口透、坂本是忠（現地参加）、島田正郎（現地参加）の八名であつたのに、韓国は金敏洙（高麗大学校教授）、成百仁（明知大学副教授、現地参加）、黄元九（延世大学校教授）の三名と少かつたが、これは当初参加を予定していたソウル大学の七人が、最後まで出国許可が出なかつたため、まことに残念であつた。

中国人の出席者は、張澄基（黒帽カルマバの法師、ペンシルヴァニア大学教授）、昌彼得（国立故宫博物院図書文献処

長）、張葳（同処員）、陳捷先（国立台湾大学教授、文学院史学系主任）、陳慶隆（国立中央研究院副研究員）、Abdullah T. Emilogu（国立政治大学教授、立法委員）、方蒙（台大政大教授、蕭啓慶（台大客座教授、ミネソタ大学）、Hannod Hakanchulu（政大教授）、Jagchid Sechin（政大教授、辺政研究所長）、李符桐（師範大学教授）、李霖燦（故宮博物院書画処長）、林恩頤（政大講師）、劉義棠（政大教授）、那琦（北医学院教授）、歐陽無畏（国史館総務課長、政大教授）、Zur Khang Dhang chen dge legs、唐屹（政大副教授）、陶晋生（台大教授）、王民信（師範大学講師）の二十名であつた。この中にはすでに旧知の老朋友も多く、会期を通じてなごやかな交歓が行われた。

その他アメリカからP I A C代表のSinor、Mongolia Society代表のHyar、ハーヴァードのFletcherのほか、Frank A. Walty, III 君（インディアナ大学）が現地参加した。

全日程は終了したが、何しろ中国式の歓迎で、そう簡単に放免してはくれない。一月一日の早朝から貸切りバスで中南部の遊覧に連行され、新竹で中食。台中で一泊してその夜は夜總會に引張り出され、翌二日は日月潭を見て新築成つた文武廟と蕃社めぐり。夜更けて高雄に到着、円山大飯店に投宿するや否や夜の街に連れ出されて夕食の後、金都楽府なる歌庁（陳捷先氏の兄上の経営）に行つて歌や演芸を鑑賞。三日

はまたは早朝から台北へ向け帰途についた。台南の文廟、赤崁樓、安平堡の見物後、嘉義で中食。出発せんとしてバスが故障、修理に二時間を費して、フルスピードで真つ暗な第一公路をふつ飛ばし、その夜に教育部長から招待されていた京劇に十五分間だけ間に合わずという離れ業をやつてのけ、このスリルに満ちたエクスカージョンは終つた。

今回の東亜アルタイ学会は、前回にも増して円滑な運営ぶり、衝に当つた陳、札奇、昌三氏の苦勞もしのばれたが、ペーパーの内容もぐんと向上し、研究の指針や資料の所在について、相互に得るところが大きかつた。ことに討論の質の高さは、出席のアメリカ人たちに大いに感銘を与えたようである。

この東亜アルタイ学会は、主催者の中華民國の現時の國際的地位にも拘らず、全く非政治的で、關係各機關代表の歡迎の辞のなかにも、一つとして政治的な臭みのある発言が聞かれなかつたことは特筆に価する。これと対照的に、学会の開会后もなく来台した別の日本人学者グループが、政治的な含みのある言動のために現地の学界からかえつて忌避され、何応欽將軍や張群秘書長の反共演説を拝聴するだけに終つたことがある。台湾でも政界、学界の底流は激しく變動している最中で、そんなところへ飛びこんで行つて、深い事情も知らずに安易な考えで行動するのは甚だ危険である。外国人は中立を厳守するにしくはない。